

Picture book of Trap

♡ 男の娘絵本 ♡

僕を女の子にする計画  
が進んでいる。



女の子になりたいと、ずっと思っていた。  
女の子になって、同じ学校の拓也の彼女になりたい。  
その拓也と、元男の子の綾美、そして  
女医で姉の恭子によって、  
僕の知らないところで、僕を女の子にする  
計画が進んでいた。



拓也の誕生日である今日、  
計画は実行され、今日から僕は

『由香』になった。

拓也の、おちんちん付き彼女になったんだ。  
お祝いにみんなでパーティをした。

飲んだ、飲んだ。  
これ以上飲んだら  
ちんちん勃たなく  
なっちまう。

おい、恭子。  
風呂に入るぞ。



姉が拓也と一緒に風呂に入っている。  
姉は何をされているのだろうか？  
胸をもまれ、ひよっとしたら  
挿入されているのかもしれない。  
まるで自分がされてるように思っ  
て、おちんちんが熱くなった。  
勃起した。

ああん、もう、  
今日から僕は  
女の子なのに…。



由香ちゃん、  
食器片付けるの、  
手伝ってくれる？

ああ、そうか。  
前が気になって  
立てないか。

あ、はい。  
でも、あの…

タイトスカートだということもあって、  
このまま立てば、勃起の膨らみが  
ものすごく目立って恥ずかしい。  
すぐに立ち上がらない由香をみて、  
綾美はそのことを察知した。

かっこわるくなんかいいわ。  
拓也にとっては、それがあなたの  
チャームポイントなのよ。

ほら、  
全然かっこわるく  
ないじゃない。

拓也と恭子さんのこと  
考えて、おちんちん  
固くなっちゃったのね。

辛いんだったら、  
出しちゃって  
あげましょうか？

今日から女の子なのに  
こんなふうになっちゃって

すごく  
かっこ悪いんだもん。

気にして恥ずかしがっている姿が、  
可愛いくて好きなんだから、  
かっこわるいなんていっちゃだめ。  
拓也に嫌われちゃうわよ。

とっても可愛いわ。

I am a girl from today.

由香がテーブルから流し台に運ぶと、  
綾美はそれを取って洗剤で洗い、  
水に浸す。

綾美の手の動きがしなやかで、  
作業に無駄がない。  
自分なんか比べ物に  
ならないくらい手際がいい。  
家事に慣れている。

食器を運び終わると、洗い終わったたた食器を  
水から取り出して布巾で拭う。

綾美の作業のリズムを狂わせてはならないと、  
一生懸命手を動かすが、  
慌てているようにしか見えない。

そんなに  
慌てなくていいわよ。

どうせ拓也たち、  
お風呂から  
すぐ出てこないんだから。



恭子と拓也はお風呂に入っている。

恭子は脚を開かれ、股間を弄られているに違いない。  
その後、壁のタイルに手をつかされ、  
後ろから貫かれるのだろうか。

「どうせ、すぐ出てこないから」という綾美の言葉で、  
二人の淫行に意識が戻ってしまった。  
手伝うことに集中し、興奮が収まりつつあったのに、  
また復活しはじめた。

窮屈なパンティが勃起を締め付けはじめ、  
スカートが盛り上がってくる。





あらあら、やっぱり  
辛くなっちゃった？  
出しちゃいませうね。



スカート  
押さえててね。



ああ、  
逝っちゃいますう。

やさしく掴んで、  
二度三度上下にスライドさせると、  
肉棒全体が大きく膨らみ、  
痙攣し、絶頂を迎える徴候を示した。



綾美はあわてて口に頬張る。



あう、  
ごめんなさい。  
また、逝っちゃいます。

今日四回目の射精だ。  
精力絶倫というのではなく、  
女性が何度でも  
エクスタシーを迎えられるように、  
少しの刺激で何度でもイクことが出来る。  
由香のこれは、ペニスの形をしたクリトリス  
なのかもしれない。  
そう思った時、その肉棒が大きく脈打った。

半日の間に  
四回も射精しちゃったね。  
大丈夫？

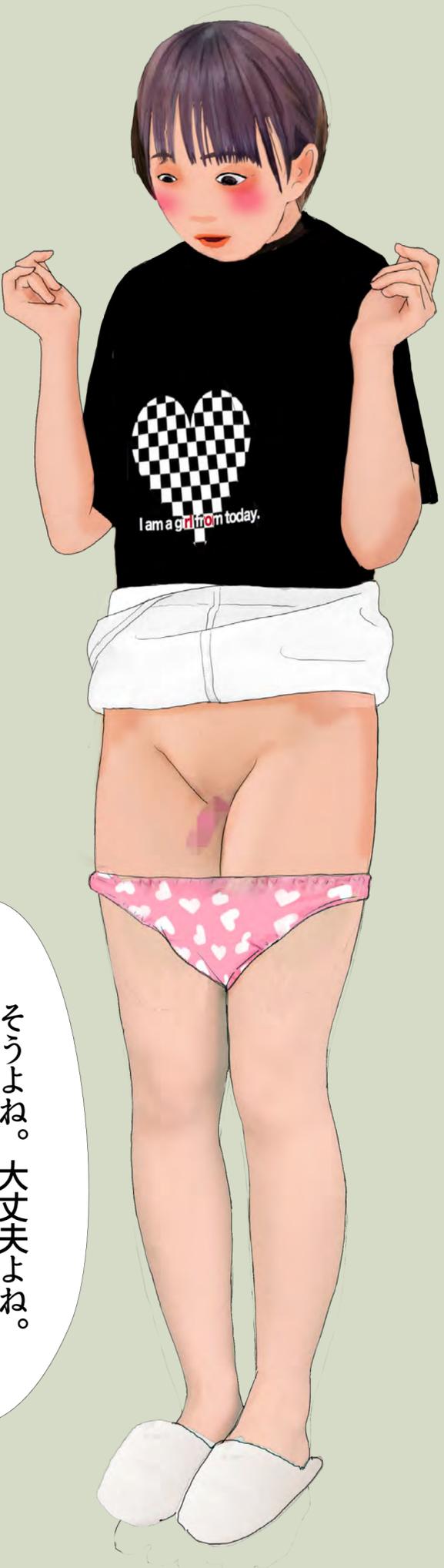
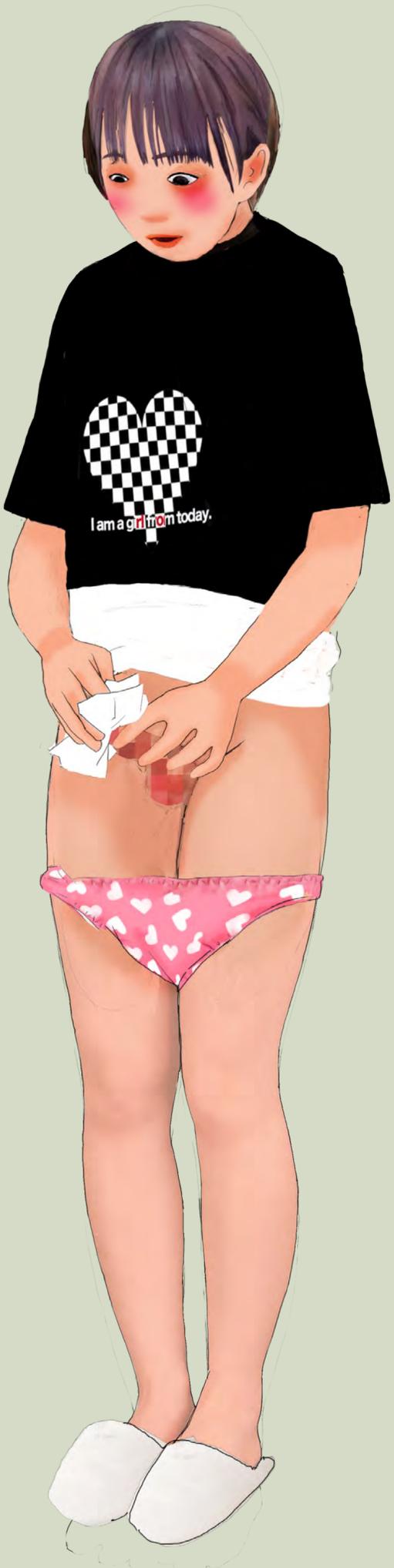


大丈夫。



今まで、半日の間に四度も  
射精をしたことなどない。  
そればかりか毎回の興奮の仕方も  
異常なほどであったから、  
ペニスにかかった負担は  
相当なものだ。  
あやみの質問は、その負担から  
痛くなってはいないか、  
という趣旨だ。  
だから、「大丈夫だ。」と答えた。

確かにペニスは、疲れ果ててまるで軟体動物のような状態になっていて、  
いままで経験したことのないような痛みを尿道に感じているし、  
ペニス全体が筋肉痛のような感覚がある。



そうよね。大丈夫よね。  
クリトリスなんでもんね。  
何度でも逝けるよね。

それとは違う不思議な感覚を、ペニスに感じていた。  
果てても果ててもすぐにまたすぐ熱くなる。  
自分のペニスは、ペニスではなくってしまったのかもしれない。  
形こそ棒状だが、一度果てると覚めて萎える男の陰茎ではなく、  
興奮し刺激を受ければ過敏に反応する  
女性の陰核と化してしまったのかもしれないと、  
都合よく感じていたのだ。  
今日から僕は女の子になった。  
だからペニスもクリトリスになったんだ。





そんな寂しそうな顔しないで。  
あなたと比べたら、私のは確実にペニス。  
感じ方はやっぱり男だもん。悔しいけど。  
でも、あなたのは、  
男の子とは絶対に違うもの。



本物のクリトリスとは違うといわれて、少し寂しくなった。  
拓也になぶられている最中に見せた姉の股間が目につかんだ。  
股間の縦筋の奥を想像して羨ましくなった。



クリトリスが  
どんな感覚なのかはわからない。  
恭子さんを見てると、  
明らかに私とは違うもの。  
羨ましいくらいに感じてる。  
だから、恭子さんに何度も聞いた。  
「どんな感じなの？」って。

でも無理よね。  
クリトリスをいじられたときの感覚なんて、  
口で説明できるわけがないもの。  
形も違うし、構造も違うから、  
ぜったいペニスとは違うにきまってる。



拓也は、あなたのこと、  
好みにドンピシャの  
男の娘なんですって。

私なんかより  
ずっとずっと。

だから、  
あなたのクリトリスのこと  
知ったら、喜ぶわよお。  
もう、あなたのこと、  
離さないわね。

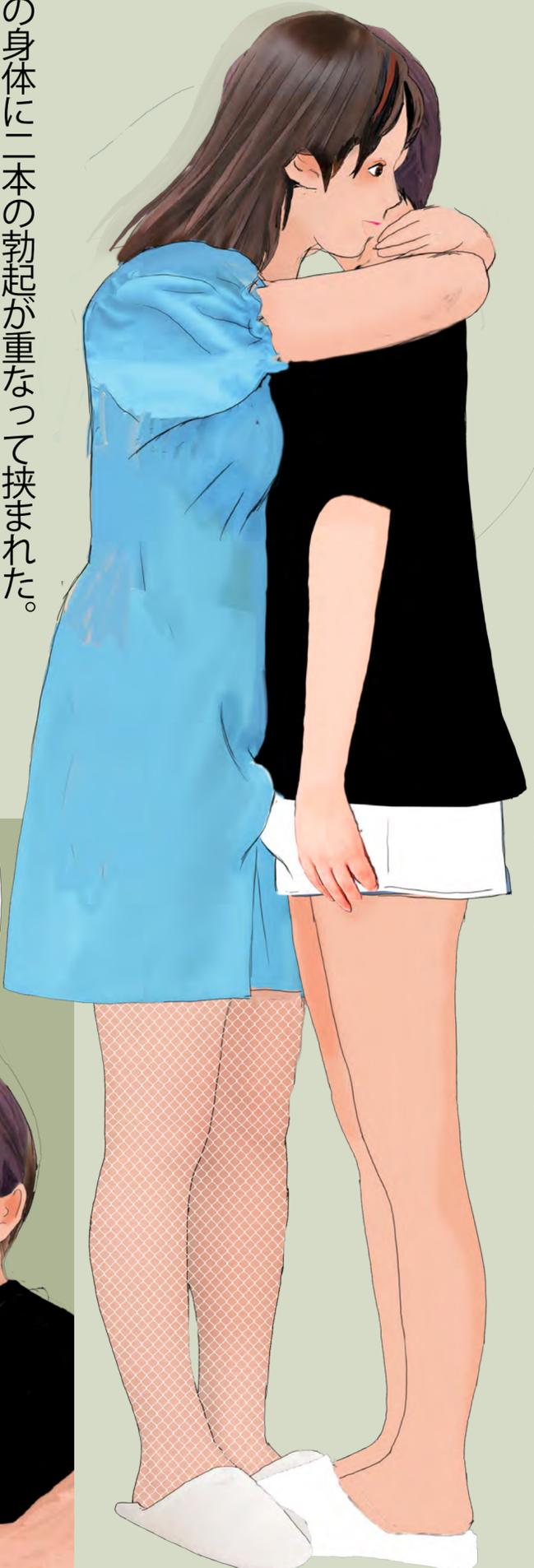


あなたのおかげで、  
私、安心して  
おちんちん取れる。  
拓也の気持ちが変わることは  
絶対ないもの。

ありがとう。



由香は股間に綾美の股間のふくらみを感じた。  
硬くなり始めている自分の棒状のふくらみに、  
明らかに固くなっている綾美の勃起が擦り付けられるのを感じた。



二人の身体に二本の勃起が重なって挟まれた。  
綾美のうなじから香る甘い香りと、  
柔らかな肌の感触に浸りながら、  
女性そのものの身体をした綾美の股間にも  
自分と同じものがついていてと確認して、  
姉のクリトリスを羨むことをやめようと思った。  
綾美の肉棒の熱さを感じながら、  
自分の股間の本物ではないクリトリスが  
堪らなくいとおしくなった。

そろそろ拓也たちが、  
お風呂から  
出てきちゃうわね。  
拓也への  
誕生日プレゼント、  
飾り付けしましょ。





お化粧すると、  
ますます女の子の気分にな  
ってくるでしょ？



髪が伸びるまでは  
ウィッグね。



ちよつと幼い感じに  
結んだほうが、  
絶対似合うと思うんだ。

鏡の中の自分の顔に由香は驚いた。  
薄く化粧が施された自分の顔は、  
恭子の十代のころの顔なのだ。  
姉が初めて化粧をしたときのことを、  
鮮明に覚えている。  
「なんでお姉ちゃんばっかしくっ」と  
強烈な嫉妬心を覚えたからだ。  
今あの時の姉と同じ色の  
口紅をつけている。  
姉と同じになった。  
あの時から姉に対して持ち続けた  
「嫉妬心」が消えた。



由香が座っている  
ドレッサーの後ろには  
一目で高級だとわかる  
大きなダブルベットがある。  
十五畳ほどの  
大きな部屋の中心で、  
この部屋の用途を  
主張している。

白い壁と暗いコーヒー色のフローリングの配色に  
合わせた濃いめな木彫のシンプルなデザインで、  
大人の寝室」という言葉がふさわしい。  
きつと、もともとこの部屋の主は  
拓也の両親であったのだと  
容易に想像がつく。

今はこの「大人の寝室」が  
拓也と綾美の二人のものであることは  
すぐわかる。  
ドレッサーには間違いなく  
綾美のものであろう  
若い女の子が好むブランドの  
化粧品がならび、ベッドの脇には、  
この部屋には似合わない、  
少年コミック本が三冊、積み重ねてある。  
この部屋に入ってから綾美の振る舞いも  
リビングや台所同様に  
この部屋を熟知したもので、  
ごくごく自然にこの部屋の雰囲気  
とけ込んでいる。



二つの枕が仲良く並んでいる。  
拓也と綾美が並んで横たわる。  
拓也の厚い唇の感触を味わい、  
自分から舌を絡ませる。  
膨らんだ胸を揉まれることで  
女であることを実感し、  
大きな手の平で  
棒状のクリトリスをつかまれ、  
扱われることで、  
拓也の性的パートナー  
であることに陶酔する。

恭子もときどき  
この「大人の寝室」で抱かれる。  
綾美とは違う  
粹のおんなの身体を  
拓也に楽しんでもらう。  
股間のクレバスを  
拓也の指でなぞられるとき、  
綾美への優越感を感じて  
より興奮するのかもしれない。



間違いなく二人は拓也の肉棒に貫かれて果てる。  
ずっとそれに憧れてきた  
恭子の子宮も綾美の直腸も、  
拓也の肉ぼっこの形を知っている。  
恭子の子宮は。肉棒で突かれる快感を知っている。  
綾美の前立腺は、肉棒で擦られる気持ちよさを知っている。  
二人ががっらやましい。  
今までどれくらい拓也に貫いてもらったのだろうか。

恋焦がれる人の  
肉棒を身体に受け入れ、  
その刺激で  
クライマックスを迎える。  
オナニーをして、  
射精をするたびに、  
自分がそうされることを  
妄想し、憧れてきた。



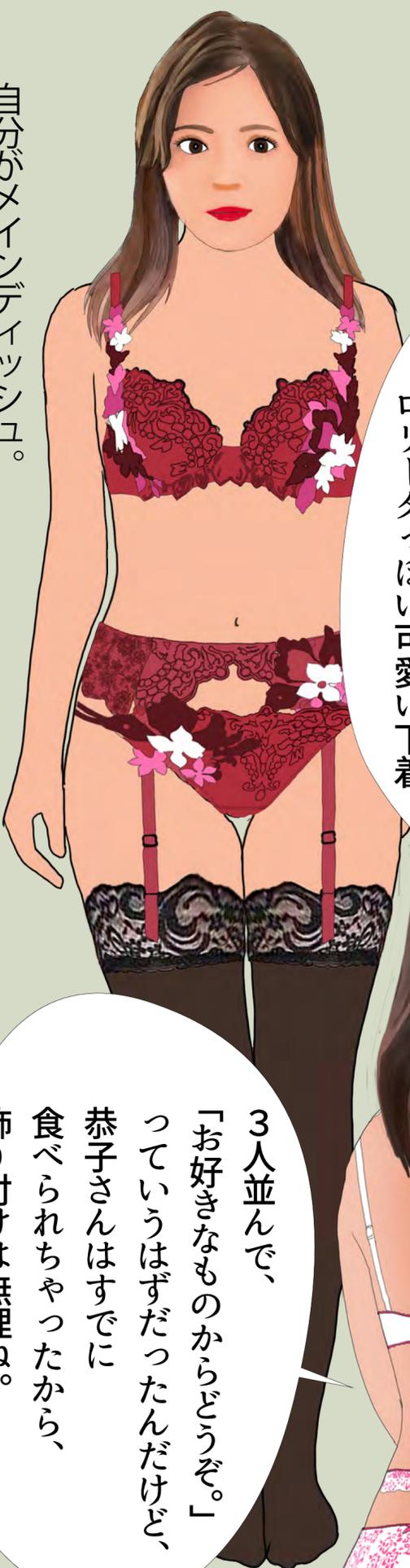


拓也へのプレゼントは私たちが特別な下着で着飾って拓也に美味しく味わってもらおうよ。



私と恭子さんはお揃いで色違い。

あなたは、メインディッシュだから、拓也が好きなロリータっぽい可愛い下着。



3人並んで、「お好きなものからどうぞ。」っていうはずだったんだけど、恭子さんはすでに食べられちゃったから、飾り付けは無理ね。

自分がメインディッシュ。拓也に食べられる。恋焦がれた人に貫かれ、クライマックスを迎える。憧れてきたその時を、もうすぐ迎えるのだ。



由香の身体は喜びと不安で小刻みに震えている。



おいっ、  
ドア開けてくれっ。

私拓也の大きな声が響き、  
その声に反応して  
由香の身体がびくつと震えた。



こっちをむけ。

由香、  
震えてるな。

由香の心臓は  
胸から飛び出しそうに  
激しく鼓動する。  
震える脚を必死でおさえる。  
今にも身体が崩れそうになる。

めっちゃ  
可愛いじゃないか。

最高の  
プレゼントだな。





はい。

あん

こうすると  
気持ちいいだろ？

あん

あんなに  
可愛く  
して  
あげ  
たい



戻りません。  
ずっと女の子で  
いたいんです。

このちんぽが  
いうこと聞くかな？

本当だな。  
もう男には  
戻らせないぞ。

口では  
そう言うが、



今日からお前は  
俺の女だぞ。  
いいんだな。

はい。

手で扱くとは  
比べ物にならないくらい  
おまんこは気持ち  
いいぞ。



おまんこに  
挿たこと、あるのか？

挿れたことないから  
そんなふう  
思うんじゃないのか。

由香は大きく首を振る。  
今まで一度も挿れたいと思っただけではない。  
挿れられたいとずっと思ってきた。  
アダルトビデオを見たって、  
男優の立場に憧れたことなど一度もない。  
女優を羨み、女優の気持ちになつて  
一生懸命ペニスを扱いた。  
同級生の女の子がうらやましい。  
姉がうらやましくてしょうがない。  
彼女たちのように挿れられたい。  
挿れられてクライマックスを迎えたい。

見てみるよ。  
あのトロットロになった  
おまんこ。  
挿れたらめっちゃ  
気持ちいいぞ。

一回挿れたら  
その気持ちよささ、  
やっぱり男のほうがいい、  
ってなるかもよ。





はい。

この試験を  
クリアしなきゃ  
彼女にはしないからな。



挿れるってこと自体が  
男の子の行為だから、  
嫌なんです。  
挿れたら、男の子に  
なっちゃおう。



彼女にしてから  
気が変わられたんじゃ  
面倒臭いからな。

じゃあ、本当に  
気持ちが変わらないか  
試そう。

恭子、  
お待ちどう様。  
ちんちん一丁  
お届けです、

拓也、  
ふざけた言い方しないで。

綾美さんの時とは違って、  
実の弟なのよ。

気持ちの整理は  
ついてるけど、  
そんなふうには  
陽気には  
なれないわ。



由幸ちゃん。

お姉ちゃん、

「かわいい」と、  
初めて握る肉親のペニスの  
感想を思わず口にする。  
「このおちんちん、  
本当はわたしが付けて生まれる  
はずだったの。  
わたしが忘れてきちゃったから、  
あなたが付けることにな  
っちゃったの。  
だから、これわたしのもの。」  
「お姉ちゃん」  
「だから、このおちんちん、  
わたしの身体に入っても  
何の問題もないのよ。」  
恭子は優しい目で由香を見つめる。  
綾美の優しさとは違う、  
肉親同士でしかあり得ない  
無条件の意思疎通の中で得られる  
優しさだ。  
由香は遙か昔、  
母に抱かれていた時の  
安堵感に包まれた。

「これで、女の子になれるのよ。

何も考えないで。」

やさしく耳元でささやく

姉の言葉が

体中に沁みてゆく。

恭子はゆっくりと

手をはわせて、

しっかりと固くなった

弟のペニスを

やさしく握る。



To be continued